

金剛寶戒寺便



令和八年六月一日発行 第一四七号

檀信徒の皆様、こんにちは。ゴールデンウイーク中に父の十七回忌法要を営みました。関東からは妹家族も帰省し、夕方から法要を執り行った後、夕食を兼ねた会食をいたしました。

子供たちの成長に伴い、一同が会する機会が減って寂しく感じていたところでしたので、大変賑やかで楽しいひと時となりました。当時は小学生、幼稚園児、乳児だった子供たちが、今では私の背を追い越し、それぞれの社会へと巣立っています。日々を見守ってくださっているご先祖様と、今回の集まりの縁を作ってくれた父に、深く感謝を捧げました。

さて、先月の講習会では飯田史彦著『生きがいの創造』をご紹介しました。日々を過ごしている、「なぜ私だけがこんな目に」という感覚に陥ることはありませんか？本書では、「人生は、私たちが自ら選んで入学した『魂の学校』である」と仮定することで、「この経験から何を学べるか？」へと肯定的に捉え直します。

本書は「死後の生命」や「生まれ変わり」というテーマを、国内外の研究事例や体験談をもとに考察した書籍です。かつて国立大学教授を務めた著者は、欧米の大学や医療機関

による研究事例を基に、過去の記憶を持つ子供たちの調査や、前世のトラウマを癒やす退行催眠の臨床例を通じて、目に見えない世界の可能性を論理的に紐解いているのが特徴です。

本書の目的は、単に霊的な存在を証明することではなく、人生の苦難を自らの成長の糧として捉え直し、前向きな生きがいを見出すことにあります。人生を「愛を学ぶための壮大な旅」とみなすことで、死への恐怖や理不尽な苦しみを、希望ある知性（認識）へと昇華させる新しい人生観を提示しています。

この本は、私が二十年以上前に出会い、大変感銘を受けた一冊です。これまでも法話会で取り上げようかと考えたこともありましたが、根本的な部分で仏教の教えとは異なる思想を含んでいるため、これまでは控えてきました。しかしながら、「もし今の時代における救済やお大師様がいらっしゃったら、人々を救うための『方便（ほうべん）』としてこの考えを用いられるのではないか」と考え直し、今回題材として選びました。

ほんの一例としての事例です。歴史的事実と完全に一致した前世の記憶あるアメリカ人女性が、退行催眠中に「十九世紀後半のスコットランドでアレックス・ヘンドリーという男性として生きていた」と語った事例です。彼女は、家族がバンフシャーに住んでいたことや、一八七八年にエディンバラ大学の医学

校を卒業したことなど、当時の大学生活を生き生きと描写しました。調査の結果、エディンバラ大学の記録に、年代、場所、名前、学名校名、専攻科目、出身地などの情報が彼女の証言内容と一致する記録が存在していた、と紹介されています。

本書では、これらの事例を単なる脳の作り話や偶然の産物とするには確率的に無理があり、「トランスパーソナル（個を超えた）な能力」や「生まれ変わり」を認めなければ説明がつかない現象として、世界中の名門大学や医療現場で真剣に研究されていると述べられています。

この「生きがいの創造」は純粹に読み物としても面白いのですが、一歩間違えると「前世がこうだったから今の不幸がある」といった、安易な運命論に聞こえてしまう危険性があります。このような考え方を他人に押し付けるのではなく、自分自身が前向きに日々を過ごすための心の糧とするならば、非常に有意義な一冊になると思います。

○大分市仏教会 法話の会 〈光西寺〉

六月二十二日（月曜日） 十三時開場

○法話の会

七月八日（水曜日） 十四時より

○写経の会 会費千円

七月十八日（土曜日） 十四時から

背伸びして 十七回忌に 写る父